

校註

日本文學大系

第三卷

大正十五年三月二十五日印刷
大正十五年三月二十八日發行

(非賣品)

日本文學大系

第二十二卷

編輯者兼

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

右代表者

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

中塚榮次郎

印刷者

東京市本所區番場町四番地

守岡功

印刷所

東京市本所區番場町四番地

凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座二一八八番
振替東京五二二九八番

解題

文學博士 尾 上 八 郎

狂言記

われ／＼の祖先は、天の岩戸の前の暗黒の中にありながら、天照大御神の御驚きになるまでも高笑をしてゐた程快活であつた。物資の豊富な國土に住んだそれらの人々の樂天的生活は久しく續いた。四圍の情況が、この生活を脅すほどに切迫して來ると、そこに慘苦の影がさし、陰鬱な心持も起つたのであつたが、暗雲がいくら低迷しても、それを透してさし來る日光の如く強い明るい原始的精神は、人々をして微笑せしめ、失笑せしめ、哄笑せしめずには措かなかつた。生活に眞劍味、嚴肅味が加はれば加はるほど、それを中和すべき快活味、更にそれから生ずる滑稽味は、ますます要求せられるのであつた。笑の國民は笑はずしては、生きられぬのである。

天の岩戸の前の簡單な一種の演技は、彦火々出見尊が、火闌降命を降服せしめた時、後者が憤

鼻を著け、頬を面に塗つて、溺苦の狀をして、「汝の俳優の民とならう」と云はれた身振、物眞似と相連關して、おのづから滑稽な歌舞の起つた事を、吾人に示した。

朝鮮、支那との交通が開けて來るに従つて、吳の伎樂、唐又は高麗の音樂が傳はつて來たが、その中に散樂といふものがあつた。このものは雜樂で、手品、輕業の如きものをも含んでゐた。これに混じたのが、從來のわが國の滑稽的演技であつた。このものの流行によつて、おのづから滑稽的所業を「さるがう」と云ふに到つた。

この「さるがう」の簡單なものは、神事などの嚴肅さから脱せしめるために、その後には催された。これはおのづから、天鈿女の所業と相通する。堀河院の御時の内侍所の御神樂の夜の陪從の家綱、行綱兄弟の舉動などは、「上より下さまにいたるまで、大方とよみたりけり。」で、人々の頤を解いたものであつた。

この「散樂」はいつしか、「猿樂」の字面で現はされて、興味が益涌すると、流行は漸次盛んとなり、民間にも巧みな者が多く出來、新猿樂も起つて來た。藤原明衡の新猿樂記には「獨相撲、獨雙六」から、「京童之虛左禮、東人之初京上」に到るまでの種々の演技は、「品王、輪鼓、八玉」等の曲藝、輕業等の類の雜藝と混じて行はれて、「都猿樂之態、鳴漣之詞、莫不斷腸解頤者也。」と

書いてあるほど、諸人の感興を牽いたものであつた。

かく猿樂は、雜藝の外に滑稽を主とした演技をしたのであつたが、この外に、また田樂といふものが行はれてゐた。それは、農人の勞苦を助けるために、田畔で演ずる、極めて單純な歌舞、及び演技であつた。藤原道長が、土御門殿でせしめた田植に演じたのはこれで、その滑稽突梯なのを人々が見て興じたのであつた。鎌倉時代に北條高時が嗜み、室町時代に足利尊氏も好んだのは、それであつた。これで、田樂がよほど盛んになつて、見る人々が「あな面白や、堪へ難や。」とまで興に入つたのであつた。然るに、義滿の時になつて、猿樂の方面に、觀阿彌、世阿彌の名人が出で、猿樂を本として、他の舞曲を綜合し、統一して、また一の新猿樂を作り出したので、田樂も勿論、その中に包含せられてしまつた。

かくして出來上つた新猿樂は、從來のそれとは面目を全然一新したものであつた。それは、已に滑稽を主とせず、漸次にその間に發生して來た眞面目な、嚴肅な、幽玄な方面を主とした。乃ち從來田樂の能、猿樂の能といつて、劇的要素をもつた演技を主として、これに悲劇的分子を多量に含ましめて、他の曲藝、輕業及び滑稽の方面を棄ててしまつた。しかしてこれが遂に、猿樂の本質の如く解せられる事となつた。この單純な滑稽味から、嚴肅味、幽玄味に進んで、あまり

多くの期間なくして、宗教的意義の極めて深い悲劇的なものとなつたのは、まことに驚くべき進歩といはなければならぬ。劇が喜劇から發達する正當の順序はそこに明らかに看取せられるのである。従つて、この演技に要する詞章乃ち謠曲は、それに伴つて前後の矛盾衝突はありといへ、幽奥深玄、國文學上、類の渺ない深味をもつたものとなつた。

嚴肅味、幽玄味が、新猿樂の本質と見なされるまでになつたのは、室町時代を概観すると、時代の通有性であることが知られる。それはまづ謠曲と同時の連歌に於いても見られる。連歌の盛んとなつたのは、平安朝の院政頃からである。敕撰集にも一部門を立てるまでになつたのは、此の時からであつた。しかし、これらは、一人が頓才的の句を吐くと、他の一人が機智的な句を以て應じる。それが、主として縁語、掛詞で出來上つてゐて、本歌の嚴格を主とするのと違つて、淺薄ながら滑稽を旨とするのであつた。然るに、鎌倉時代になつて、從來上下二句を連ねてゐたのが、五十句、百句を連ねるに到るとともに、漸次本歌の如くに、眞摯味を含み、嚴肅味を加へて來た。更に室町時代になると、それに一層の深みを有つやうになつた。乃ち形式的の修飾でなく、内容的の意義の豊かならむことを務めた。この進歩した状態が連歌の本質と解せられて、しかも從來の和歌をも壓する勢で世上に廣まつた。

以上のごときことは、また、前述の韻文のみならず、散文の方面でも見られる。乃ち當時の散文、ことに當時を代表する軍記物語は、處々に放笑的事件を含んでゐて輕快なところもあるが、一體に暗澹であり、陰慘であり、佳麗の個處、絢爛の語句はあつても、それに貫流してゐる宗教的思想によつて、全體の嚴肅さ、眞面目さ、重たさ、深さは讀んで胸を壓され、頭を重くせしめられる。

かく韻文でも散文でも、眞實になり、嚴肅になり、宗教的になつたが、しかしそれらによつて壓倒せられ、閑卻せられた滑稽味は、決して減しはしなかつた。天の岩戸の前の暗の中で高笑した國民の子孫は、未だ原始の樂天的精神を失はず、依然として快活味は保有してゐた。これから發する滑稽味及びその趣味を深く味ひ、且つ味ふべく要求する希望は極めて根強いものである。故に時代に若干の差こそあれ、連歌には、嚴肅に對して諧謔を主とし、古典的な、幽玄的な趣致に對して、現代的な放笑な興味を基とした諷刺連歌が生じた。散文には、對者の低級なために、猥雑に陷つてはゐるが、眞面目さ、重たさ、深さに對して、極めて淺い、輕い滑稽味を發揮したものが、御伽草子中に續々と現はれて來た。

以上と同じ基礎の上に眞摯な、幽玄な、宗教的な、悲劇的な、古典的な新猿樂に對して、諧謔

な、滑稽な、喜劇的な、現代的な狂言が構成せられた。古典的知識に缺け、宗教的趣味に薄く、過去を忘れて現代のみを知つて居る當時の民衆は、孰れもこれを歓迎し、喝采し、失笑し、哄笑し、原始的精神を満足せしめたのであつた。恰も彼等が、誹諧連歌や御伽草子を讀み耽つたことの如くに。

明らかに室町時代は前後の二期を劃する。真面目な、古典的な、宗教的な傾向の盛んであつた時期と、滑稽な、現代的な、非教權的な時期とがそれである。謠曲は連歌軍記等とともに所期の產物であり、狂言は誹諧連歌、御伽草子等と共に後期の產物である。

狂言は、今日一般に知られてゐるのは、狂言記、續狂言記、狂言記拾遺、狂言記外編所載の各五十番、合計二百番であるが、和泉流狂言名寄一覽には、二百五十六番に上つてゐる。これらは皆、和泉流のものであるが、鶯流のものには、芳賀矢一先生蒐集、友人長谷川福平氏校訂の狂言補遺二十番がある（國民文庫、狂言全集採録）。この故に、諸流のものを悉く合すると、いよ／＼多くなるに相違ない。

狂言には三流がある。大藏、鶯、及び和泉がそれであるが、その中に、和泉流が最も盛んで、その狂言も、前に挙げた如く詞章も版本になつて、早く流布してをり、人も熟知してゐるのであ

る。しかし、詞章は大藏流が尤も長く、鷺流は、それよりも簡單であるが、和泉流よりも長い。乃ち鷺流が中間で、その長短の兩端を大藏、和泉の二流が行つてゐるのである。これとともに、それらの詞にも異同があるのは、云ふまでもない事である。しかし、これらは、流派の分れた後の事で、もとは大抵同様で、演者によつてのみ多少の差異があつたのであらう。

狂言の最初のものは、どんなであつたか。それは、猿樂傳記にあるがごとく、「能の内の答を仕り、中入の時間の延引の所を結ぶ。」のであつた。乃ち、能の附屬として、補助の役を勤めるに止まつたのであつたが、おひ／＼發達して、一番の演技となり、觀者の笑を買ふべく、滑稽味の纏まつた表現をなすに到つたのであらう。

この狂言の詞は何人が作つたか。これは今日に於いては、殆んど探求し難いのである。吾人は狂言中に、屢謠曲の語句に出逢ふ。例へば、舟ふなの中の、「山田矢ばせの渡船の、夜は通ふ人なくとも。」云々は、謠曲三井寺にあり。三人片輪及び樋の酒の中の、「又花の春の清水の。」云々は、熊野にあり、猿替勾當及び比丘貞の中の、「一天四海波を打ち。」云々は、土車にある。櫻譚ひの中の、「花見車くる、より。」云々は、小鹽にあり。寢聲の中の、「錦帳の下とは、廬山の雨の夜。」云々は、芭蕉にあり。樋の酒の中の、「兵の交、頼みある中の酒宴かな。」は、羅生門の中にあり。比丘

貞の中の「岩木にあらざれば、心弱くもたちかへる。」云々は、紅葉狩にあり。花子の「捨ててもおかれず取れば面影に。」又棒縛の中の「月は一つかけは二つ。」云々は、共に松風の中にある。かやうな事は、或は後の攪入かとも考へられるが、むしろ、謠曲の發生し、且つ流行した後に出来たことの證據とするが、正當と思はれる。それは、狂言の中に、全然謠曲を擬したものがある。

法師物狂、枕物狂の如きは、狂女物に擬して作つたものであり、雙六僧、樂阿彌、蛸、祐善の如きは、幽靈能に擬して作つたものであり、殊にその中の通圓は、全く頼政をすつかりもぢつたものである。これらは皆、謠曲が流行して、何人にも知悉され、始んど諷誦的にもなつた時代に出來たものである事を十分に證據立ててゐる。これも、上述のもののみが謠曲成立以後に出來たもので、以外はいづれも、それよりも古く作られたものであらうと推測せられぬ事もない。しかし大體の組織に於いて、狂言は謠曲の模擬である。その展開、葛藤、解決（或は狂言には破綻もある。）の順序が、謠曲と同様である。是等から考へても、狂言は謠曲よりも遅れたものといふが自然である。故に普通いふごとく、正平五年に没した北畠玄惠が五十九番までも作つた、或は百六十番までも作つたといふのは、時代を無視した説であらう。殊にその五十九番中には、三人片輪、花子、比丘貞があり、また枕物狂もある。謠曲が、義満時代から順次に出來たと考へられる

と共に、狂言は更にそれに随伴して作られたと考へられる。従つて狂言中七十八番は、金春四郎次郎（金春禪竹の末子）、宇治彌太郎が作つたといふのは、或は幾分の信を措くべきかと思ふが、しかし確證がないのであるから、大體作者不明として置くより仕方がない。

しかし玄恵は、傳説的に、狂言の始祖の如く考へられてゐる。その後を承けたのが、日吉彌兵衛で、更にその後を承けたものが、宇治に住んで宇治と名乗り、後又大藏と改めたので、大藏流の名が生じた。その一系中の大藏彌太郎の門人に、宇治源右衛門があり、そのまた門人に、山脇和泉守元宣があつたので、和泉流の名は、こゝに生じた。更に、長命權之丞といふのがあつて、狂言が巧みで秀吉の氣に入り、ある時川に飛び入り、驚の鰻を踏むまねをしたので、驚と呼ばれたと云ひ、或はまた、攝津磯島に住んで、生れ付き首が長く、しかも水邊に居るので、おのづから驚といふ異名が付いた。これによつて驚と云つたといひ、歸著するところを詳かにせぬが、ともかく長命氏が驚となつたのは事實で、それから驚流が生れ出たのであつた。しかし、今日行はれるのは、大藏流と、和泉流との系統に屬するものであるといふ。

これらの狂言は、演技上三種に分たれてゐる。順序として、最初に出すのを脇狂言といひ、次に出すのを二番目狂言といひ、その次のを雜狂言といふ。最初のは、祝賀の意のあるものを主と

し、末廣がり、目近、連歌毘沙門、寶の槌等で頗る多く、次に來るものは大人物、乃ち大名が主役となるものを主とし、文相撲、入間川、鞍猿、墨塗等で少々少なく、その次のは、種々雑多のもので、二千石、富士松、昆布賣、舟ふな等で、この最後の最も多いのは云ふまでもない。

結構の上から狂言を見ると、前に述べた通りに、謠曲と極めて類似してゐる。たゞ謠曲は、大體内容が單純でないの、おのづから比較的複雑した構成を有してゐるのであるが、狂言は、それに反して事件が主で、而もそれが極めて理解し易いものである。全體が、極めて小規模に出来てゐる。謠曲には、まづ主役の出現の道程として、いはゆる道行がある。これがすんで、主題に這入つて行くのである。狂言にも、それと同じく、「藥種も持たぬ敷醫師、きはたや頼みならむ。」とか、「地獄の主閻魔王々々、邏齋にいざや出ようよ。」とか、「戀路に迷ふ憂身の上く命や限りならむ。」とか、「貝をも持たぬ山伏がく、道々うそを吹かうよ。」とか、「人目をつゝむ旅なればくまだ夜の中に出でうよ。」とか先づいふ。ことに謠曲を摸したものには、必ずこれがある。「我が荒増の末とけてく、會下傘や友となるらむ。」「邏齋に出づる門脇にく、犬の伏せるぞ悲しき。」「茶かはりもなき往來のく、行末何となるらん。」「ほろりとしたる往來のく、茶替のなきぞ悲しき。」など云ふのであるが、これも、極めて簡單である。而もこれの無いのが大多

數で、直ちに、「罷り出でたるは、この邊に住居仕る勾當の坊でござる。」とか、「罷り出でたるものはこの邊の茶屋でござる。」とか云ふ。而も猶簡單に、「罷り出でたるは、隠れもない大名。」又は、「八幡大名。」「御存じの者。」猶すべてを畧して、すぐに、「冠者あるか、やい。」と本文にかゝる。本文に入つて、謠曲には、多くの曲折がある。複式能にあつては、多くは、僧と樵夫、漁人等と問答があり、終つて、局面が一變すると、さきの樵夫、漁人は、過去の英雄、豪傑、才子、佳人となつて出現して、當時の状態を語り、今の苦惱を述べて、一遍の廻向を依頼するので、僧が快諾して誦經すると、直ちに解脱して成佛するのである。かくの如く、二局面に分れるのは狂言には極めて稀である。それのあるのは、強ひて謠曲を摸したから起つた事である。大體に於いて、狂言は謠曲の單式のものと同通じ、而も、それよりも更に簡單である。併し、前に述べた三段の順序は、自づからある。乃ち僧が參詣の道に出たので事件が開展する。茶屋に憩うて、茶代を拂はぬ。茶屋の主人は、拂はせようすると、僧は錢をもたぬ。主人は、「この先には渡がある、錢がなくては渡してくれぬどうするのか。」と云ふ。僧、「それなら止むを得ない。こゝから歸らう。」と云ふ。主人は憐んで茶代を取らず、「渡守は秀句が好きだから、それを云つて渡してもらへばいい。」と教へる。僧は喜んで立ち去つて、渡にかゝる。渡守が渡す。船賃を請求する。僧、「秀句で

わたさう。」といつてまづその事を云ふ。簡單ながら葛藤を生ずる。向岸に著くと、僧は秀句の半を忘れてしまつて、渡守に叱責せられるといふ破綻に終る（薩摩守）。これはかく破綻となるのであるが、大名が、太郎冠者を、末廣を買ひに遣はすので事件が展開し、冠者がすりに欺かれて、傘を買はせられる。歸つて主人に叱られるので、葛藤を生ずる。冠者はすりに教へられた囃物をする。それで大名の心が解けて、ともに踊るので、事件はめでたく解決するといふに終るものもある（末廣）。この二様の結末があるところが、謡曲と違つて、格別の印象を觀者に與へ、無邪氣さに微笑せしめ、無學さ、無識さに放笑せしめ、その無様、不體裁に、或は他意なき悅樂、歡喜に哄笑せしめるのである。この二様の結末があつて、狂言に變化もあり、生命の半もあるのである。

能の演技には、主として、シテがあり、それに對して脇があり、更にシテ連、ワキ連があるが如く、狂言にも、またこれらと同様の諸役がある。乃ちその主たるものは、シテであること、全く能と同様である。しかし、それに對するものをアドといふ。アドは、あどもふの意か、あとうつの意か不明であるが、所作の方から云へば、全く能の脇である。そのアドの多數の時は、一のアド、二のアド、立衆等といふ。

狂言のシテとなり、アドとなるものは、多くは、當時の社會に現在し、活動してゐる諸種の階級の人々である。勿論、その以外に雑多のものも出るが、その主となるものは、現實の人々である。乃ち、大名、その妻妾、太郎冠者、次郎冠者、僧、新發意、田舎者、奏者、商人、猿引、茶屋、盜人、山賊、すり、目代、百姓、山伏、佛師、禰宜、婿、舅、夫、妻、親、子等がある。不具者には吃、顰、座頭、手なし等がある。この類が屢現はれるのは、乃ち狂言の社會的喜劇たることを、よく證明してゐる。

しかし、以上の人間のみに止まらず、時に人間以外のものが出る。乃ち神、佛、閻魔王、鬼、幽霊等もあるが、更に動植物の精靈の松、蚊等も出る。過去のものも再現する。勇者の朝比奈、爲朝、繪師の金岡等がそれである。

これらの中、最も多いのは、大名に關するものである。當時の武家は、社會上、何人よりも強い勢をもつて居つた。故に、他の何人もこれと抗争すべくもない。そは、その有してゐる生殺の權力が、無法に行使せられる場合が多いからである。しかし、事實に於いては、戰爭の時代、體力をもつて、強者が地位を獲得する時代が過ぎて、その後を承けて、因襲の力は、強者ならずとも、その地位に居らしめた時代となつたのであるから、大名も、戰場に馳驅したその父祖から見

れば、すべての點に於いて、遙かに劣者であつたのである。當時の平民は、その點を看破した。故にこゝに力を入れて、多くの誇張を加へつゝ、極端に、その低劣さ、無能さを暴露した。太郎冠者に、萩見を勧められて、人の庭に行く。歌を詠するを強ひられて、冠者に教へられた儘を云ふ。冠者が座を外すと、直ちに忘卻して、主人に叱責せられる類は、文學的修養の不足さを痛罵したのである。これらは、武士として或は許すべきであらう。しかし専門の武藝に必要な大刀の名をも知らず、栗田口を人と信じて、些も疑はぬといふが如きは、驚くべき無識である。猶甚しく虚飾的である、見得坊である。新に家來を抱へようとして、太郎冠者に、自家の富有と、自個の威嚴とを示さしむべく云はしめる常套語の如きは、甚しい空威張である。

以上の外に、この人々は著しく怯懦である。禁野に狩して、里人に捕へられ、大刀も衣裳も皆奪はれるが如き、強ひて大刀を持たせた昆布賣が憤慨して、俄にその大刀を抜くと、平身低頭して、その意のまゝに行動するが如きは、夥しく武強的であつた父祖を極端に辱かしめるものである。これらはまだ一人であるので、或は些か恕すべきであらう。しかし、二人して出遊し、強ひて大刀を持たせた町人を怒らしめて、その大刀によりて脅嚇せられると、二人共に跪拜して命を乞ひ、小踊を演じて様々に愚弄せられるが如きは、何處に武士の眞骨頭ありやと嘆息せしめる。